

# 留学生に対する日本語教育のアーティキュレーションの問題

— 2012年5月筑波大学留学生センター補講コースにおける  
J-GAPアンケート調査の結果から —

加納 千恵子 魏 娜

## 要 旨

日本語教育学会のグローバルネットワークはJ-GAPプロジェクトを通じて日本語教育のアーティキュレーションの促進を図っており、その中で香港・日本チームは、日本に留学してくる学生における日本語教育のアーティキュレーションに関する意識を探るため、アンケート調査を作成した。本稿では、2012年度5月に筑波大学留学生センターの日本語補講コースにおいて実施された調査の結果から、留学生に対する日本語教育のアーティキュレーションの問題を分析・考察する。調査の結果、回答した留学生たちから特に大きなアーティキュレーションの問題は見られなかったが、留学生センターの日本語補講コースには異なる背景をもつ留学生が混在しており、特に中上級の技能別クラスにおいて漢字圏・非漢字圏による学習意識の違いが大きかった。

【キーワード】 日本語教育 アーティキュレーション 学習意識 漢字圏学習者  
非漢字圏学習者

Problems of Articulation in Japanese Language Education  
for International Students : from the results of a survey  
conducted at the International Student Center,  
University of Tsukuba on May, 2012

KANO Chieko, WEI Na

【Abstract】 The Global Network of the Society for Teaching Japanese as a Foreign Language is promoting the articulation of the Japanese language education through J-GAP project, and the Japan/Hong Kong team developed a survey sheets in order to know the students' awareness of the articulation of Japanese language education in this project. This paper reports on the results of a May, 2012 survey concerning articulation problems in Japanese language education for international students at the International Student Center of the University of Tsukuba. The results of the survey indicate that the students were not aware of any major problems. However, for the intermediate and advanced levels, a large difference in learning awarenesses became apparent between students with a kanji background and those without.

【Keywords】 Japanese language education, articulation, awareness, students with a kanji background, students without a kanji background

## 1. はじめに

日本語教育学会のグローバルネットワークでは、J-GAP<sup>1</sup>と呼ばれる日本語教育のアーティキュレーション（連続・連関）の問題を考えるプロジェクトを立ち上げ、世界のさまざまな地域でのこの問題を解決するための取り組みを始めた。この中で筆者の関わる香港・日本チームは、日本に短期留学してくる留学生における日本語教育のアーティキュレーションの問題に焦点を当て、それに関する留学生の学習意識を探るために東京外国語大学日本語教育センターおよび筑波大学留学生センターにおいてアンケート調査を実施した。

本稿では、2012年度5月に筑波大学留学生センターの日本語補講コースにおいて実施された調査の結果から、留学生に対する日本語教育のアーティキュレーションの問題を分析・考察する。

アーティキュレーションとは、「離れた部分を結合、接続させる」という意味であり、Byrnes (1990)は、アーティキュレーションを“the well motivated and well designed sequencing and coordination of instruction toward certain goals”と定義付けている。また、アーティキュレーションの形式について、高橋・服部 (2000)によれば、Lange (1982)は、Vertical、horizontal、interdisciplinaryの3つを挙げている。

Verticalつまり縦のアーティキュレーションというのは、レベルとレベル間の関係、たとえば高校と大学における日本語教育の連続性や同一教育機関内での学年間の教育の連続性を図るといような場合である。それに対して、horizontalつまり横のアーティキュレーションというのは、同レベル間での関係であり、たとえば、他国の大学から日本の大学に留学して単位を取得し、また本国にもどるような場合の日本語教育の連続性などが考えられる。筑波大学留学生センターの補講コースにおける中上級の技能別クラスの場合、同じレベルの「聞く」「話す」「読む」「書く」「文法」「漢字」クラスの教育内容がどのような関係になっているかということもこの問題となる可能性がある。そして、interdisciplinaryは、日本語教育と他の外国語教育との関係や他の専門分野との学際的な関係、あるいは社会に出てからの活動や就職などとのつながりを指すものであろう。

これらの3つのアーティキュレーションはいずれも教育の目標を達成するために重要なものであると考えられるが、本稿ではこのうち、留学生が本国で受けて来た日本語教育と筑波大学留学生センターにおける日本語教育との間に見られる横のアーティキュレーションの問題、および留学生センターの日本語コースにおける初級から上級までのレベル間に見られる縦のアーティキュレーションの問題の解明に焦点を置く。

## 2. アンケート調査の概要および回答者の属性

アンケート調査用紙は、以下のように、アンケート回答者の属性に関する質問が6つと、本学における日本語のプレースメントテスト（以下PTと略す）、日本語コースのレベルや

内容、および回答者の国で受けた日本語教育とのアーティキュレーションに関する15項目からなっている。（【資料1】は日本語版であり、その裏面に英語訳か中国語訳をつけたものを使用した。）

- (1) アンケート回答者の属性に関する6項目  
国、性別、学習年数、身分、来日時期、筑波大学における日本語学習開始時期
- (2) PTに関する5項目
  1. 筑波大学でPTを受けたか
  2. 受けたPTの種類
  3. PTの結果プレースされたレベル
  4. プレースされたレベルの適切性に関する満足度
  5. プレースされたクラスが自分に合っていたかどうか
- (3) レベル変更に関する4項目
  6. Q5で易しすぎたり難しすぎたり場合、レベル変更をしたか
  7. 変更した結果のレベル
  8. 現在（変更後）のレベルの適切性
  9. 現在（変更後）のクラスが自分に合っているかどうか
- (4) 日本語コースのオリエンテーションに関する2項目
  10. オリエンテーションでの日本語のコースに関する説明が理解できたか
  11. オリエンテーションでの日本語コースの成績のつけ方についての説明が理解できたか。また、成績のつけ方は国と同じか。
- (5) アーティキュレーションに関する4項目
  12. もし適切な日本語コースが筑波大学になかったら、どうしたか
  13. 来日して筑波の日本語コースを受ける前に国でやっておいた方がよかったと思うことがあるか
  14. 国へ帰った後も日本語の学習を続けるか
  15. 回答者が国で受けた日本語教育と日本に来てから受けている日本語教育との間のアーティキュレーション（連関）はうまくいっていると思うか

アンケートの回答者は、初級から中級、上級までの合計119名であり、その属性は以下の通りであった。

図1は回答者の割合を大きく地域別に分けた結果である。国別にみると、中国59名、台湾4名、香港1名の漢字圏が計64名（54%）と半分以上を占めている。次に多いのがアジア計26名（22%：タイ9名、インドネシア5名、マレーシア3名、インド・ベトナム各2

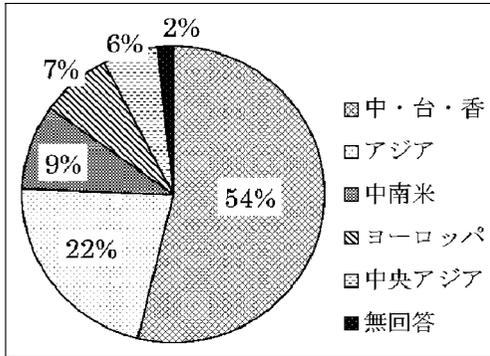


図1：回答者の地域別の割合

名、韓国・ラオス・バングラデシュ・ミャンマー・カンボジア各1名)であった。ほかに、中南米11名(9%：ブラジル4名、メキシコ3名、ペルー3名、ベネズエラ1名)、ヨーロッパ8名(7%：フランス、ドイツ、スペイン、フィンランド、ブルガリア、ルーマニア、リトアニア、ラトビア各1名)、中央アジア7名(6%：ウズベキスタン3名、タジキスタン3名、キルギス1名)があり、無回答が2名(2%)あった。

図2は性別、図3は学習年数、図4は身分による回答者の割合である。

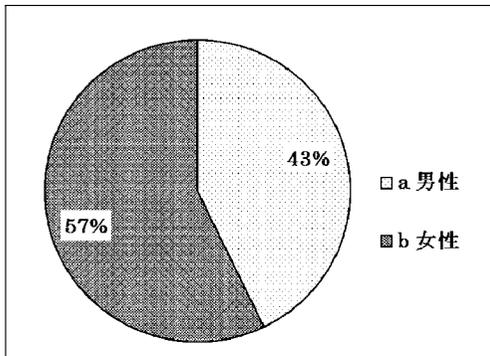


図2：回答者の性別の割合

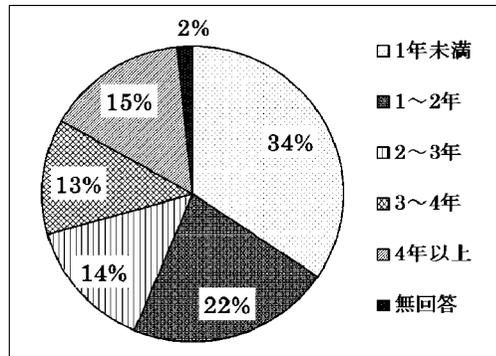


図3：回答者の学習年数

図3をみると、回答者の34%は日本語学習歴が1年未満、22%が2年未満、すなわち半数以上が初級者であるという結果である。また、図4をみると、回答者の42%が大学院の正規生であることがわかる。元来、留学生センターにおける日本語補講コースは、大学院の受験を目指す研究留学生のために提供されていたものであった。彼等は大学院に合格した後は留学生センターの日本語コースを履修する必要はなく、また学類(学部レベル)の留学生も、日本留学試験や日本語能力試験などによる選抜を経ているため、補講コースの受講を必要とするレベルではなかった。

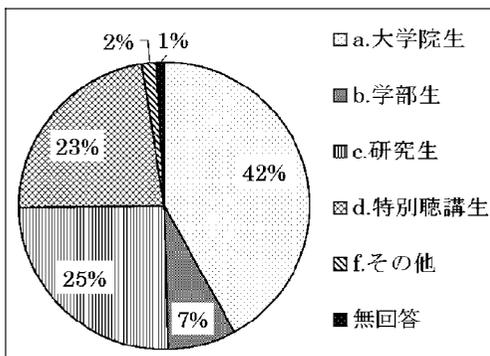


図4：身分別の回答者

そこに、この10年来、特別聴講生と呼ばれ

る短期留学生が参入するようになり、研究生と短期留学生という学習ニーズの異なる2種類の受講生の存在により、日本語コースのシラバス、カリキュラムの在り方をどのようにすべきかという論議とコース形態・内容の見直しが繰り返されて来たという経緯がある。

しかしながら、今回の調査でわかったのは、現在日本語コースを受けている受講生の大きな部分を占めているのが大学院の正規生であり学類（学部）の正規生も7%いるということである。これは文部科学省のグローバル人材育成という目標に沿って、グローバル30をはじめとする英語による学位取得の道が開かれつつあるという大きな流れの中で、本学でも日本語力によらない入学選抜が加速化され、その結果、大学院あるいは学類の正規生

になっても、日本語の学習が必要な者が増えているということであろう。依然として、従来のようなニーズを持つ研究生も25%、特別聴講生（短期留学生）も23%おり、この結果は、受講生の多極化を意味し、今後留学生センターにおける日本語教育をどのような方向に持って行くべきかを考える時期に来ていることを示唆していると思われる。

図5は回答者の来日時期、図6は筑波大学における日本語学習開始時期の割合である。

2012年5月に実施した本調査において、回答者の47%が2011年の来日、34%が2012年の来日と答え、また彼らの37%が2011年に、38%が2012年に本学で日本語学習を開始したと回答している。従来の日本語補講コースの受講者は、研究生として来日時期から1年～2年かけて大学院の受験準備をする者が多かったが、現在では、来日直後に大学院に入り、同時に留学生センターにおいて日本語を学習する者が増えているということであろう。

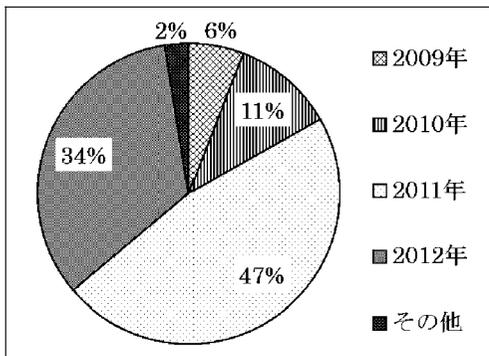


図5：回答者の来日時期

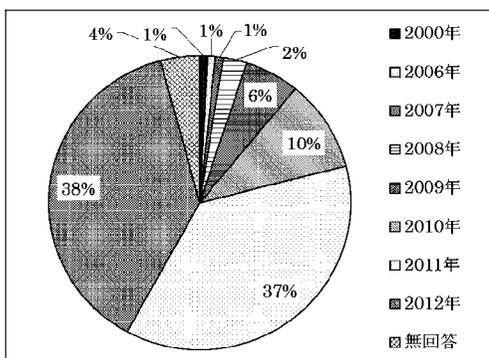


図6：回答者の本学における日本語学習開始時期

### 3. 結果の分析と考察

本節では、調査の結果を「PTに関して」、「レベル変更に関して」、「日本語コースのオリエンテーションに関して」に分けて本学の留学生センターで学んでいる受講者の意識を探る。そして最後に、「日本語教育のアーティキュレーションに関して」受講者がどのよう

に感じているかを検討する。

### 3.1 PTに関して

PTに関する5項目についての結果は、図7～図11のようになった。

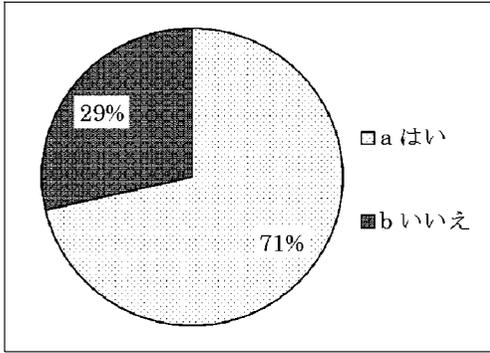


図7：PTを受けたか

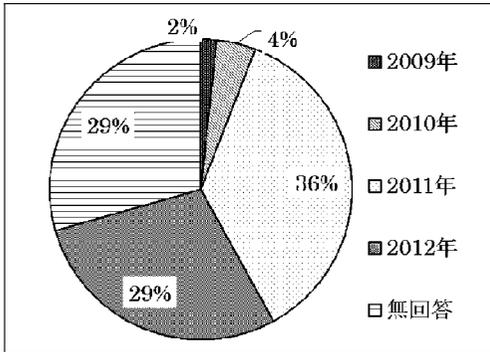


図8：PTを受けた時期

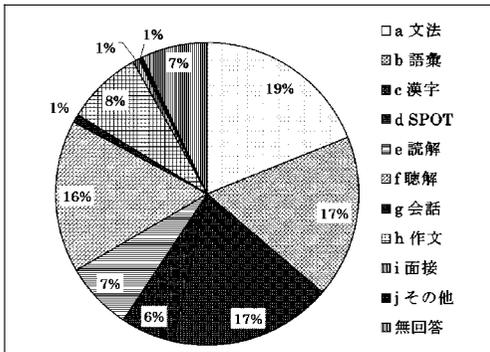


図9：PTの内容

まず、「PTを受けたか」という質問に対しては、図7のように、受けた者が71%、受けていない者が29%という結果であった。これは、筑波大学留学生センターでは、受講申込み時に日本語を全く学習したことのない学生にはPTを課さず、自動的にJ100レベルで受け入れていることによる。

図8は、PTを受けた時期に関する質問への回答結果である。2012年1学期の受講者で、2012年4月に受けた者が29%、前年の2011年に受けた者が36%で最も多かった。2010年度に受けたという者が4%、三年前の2009年に受けたという者が2%で、大学院正規生のように、1学期あるいは1年未満しか日本語を学習していないと思われる者がかなりいることがわかる。ただし、無回答が29%もいることから、おそらくいつ受けたか覚えていないほど長く留学生センターで日本語の授業を取り続けている者もいることが推測される。

図9は、PTの内容について聞いた質問の回答結果である。実際に留学生センターのPTで行われているのは、文法テスト、語彙テスト、漢字テスト、SPOTテスト、聴解テスト、作文テストであるが、回答の割合が多かったのは、文法(19%)、語彙(17%)、漢字(17%)、聴解(16%)の順で、作文(8%)という回答は少なかった。この調査は東京外国語大学と共通の質問項目で行われたため、本学留学生センターでは行っていないテスト項目も含まれている。たとえば、読解のテ

トや会話のテスト、面接は、実際には行われていないにも関わらず、それを選んだ回答者たちが少数ながらいたということは、留学生の日本語のテストに対する先入観のようなものを表しているとも言える。あるいは、留学生たちは、何をテストされているのか、それほど明確には意識していないということもできよう。

図10は受験者がプレースされたレベル<sup>2</sup>の回答、図11はプレースされたレベルが適切だと思っているかどうかの回答結果である。

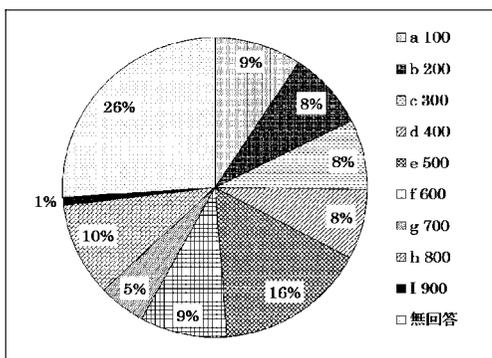


図10：PTの結果レベル

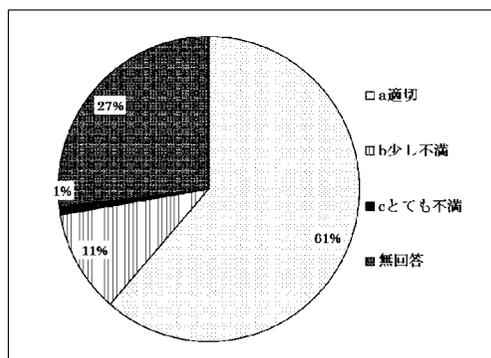


図11：PT結果の適切性に対する満足度

まず、図10を見ると、留学生センターでPTを受けた受講者で、J100の初級者が9%、J200が8%、J300が8%、J400が8%で、初級者が全体の約3分の1(33%)を占めていることがわかる。最も多かったのがJ500で16%、次にJ800が10%、J600が9%、J700が5%と続き、中級者の合計が全体の40%を占めている。上級者(J900)は全体の1%しかないという結果であった。無回答者が26%いるが、おそらく初級か初中級の者と思われる。

次に、図11を見ると、全体の61%がPTの結果のレベル判定を適切だと思っていることがわかる。「b. 少し不満」に思っている者が11%(14人)いたが、その内訳と理由は以下の通りであった。(理由は、間違いもそのまま記述し、レベル順に並べた。)

- ・ フランス (100レベル) : There is maybe a level between J100 and J200
- ・ 中国 (200レベル) : 自分がこんなに下手なのかは思わなかった。
- ・ ブラジル (300レベル) : Kanji level was too high.
- ・ タイ (400レベル) : I think it' s very fast and sometimes it...
- ・ ドイツ (400レベル) : I' m studying now the same grammar what I studied before in my country.
- ・ 中国 (400レベル) : 回答の時間は短いため、レベルはちょっと不正だ。
- ・ 中国 (500レベル) : 各レベルの配布がちょっと合わない。
- ・ 中国 (500レベル) : 学習者のレベルの差が大きい。

- ・リトアニア (500レベル) : Placement test tests how quickly you answer.
- ・ウクライナ (600レベル) : The kanji level was lower than it is.
- ・中国 (600レベル) : ちょっと合わないと思っていた。
- ・台湾 (700レベル) : その後受けた日本語授業は難しかった。
- ・中国 (800レベル) : 会話の授業が難しく感じました。どうやってこのレベルに決めたんでしょうか。
- ・ペルー (800レベル) : There was no speaking test.

不満の理由としては、コンピュータによるテストに慣れていないためか回答時間を短く感じているものが3件(タイ、中国、リトアニア)、会話のテストがないことへの不満が2件(台湾、ペルー)、漢字のレベルが合わないという不満が2件(ブラジル、ウクライナ)あった。その他に、同じレベルにいる学習者の力の差や実際に受けた授業が自分のレベルに合わないなどの回答も見られた。「c. とても不満だ」と答えた1名は中国の500レベルの学生で、理由は「漢字のクラス」とのことであった。

この中でドイツの400レベルの学生の不満、すなわち「すでに習った文法ばかりなので、もっと上のレベルに行きたい」というのは、この調査の外でも普段よく聞かれる初級後期の短期留学生に典型的な不満である。海外の教育機関における初級、中級、上級というレベルの分け方(大学1、2年生で初級を終わり、3年生になったら中級レベル、4年生になると文学などを読む上級レベルと呼ばれる)の意識と、日本の大学の留学生センターにおけるレベル分けとが異なるために生じる、まさにアーティキュレーションの問題であると思われる。

次に、「プレースされたクラスが自分に合っていたかどうか」を技能別に質問した結果が図12～図18である。ここでも、無回答者が約30%～40%おり、自分では判断できないということであろうと思われる。図19は、日本語プログラム全体を総合的に見た結果で、「ちょうどよい」という回答が約50%、「易しかった」という回答が7%で、「難しかった」という回答が3%、判断できないためか無回答者が40%という結果であった。

これを技能別に見ると、異なる傾向が見られた。文法(図12)、読解(図15)、作文(図16)、聴解(図17)の結果は、日本語プログラムの総合評価(図19)とほぼ同じで、「ちょうどよい」が約半数いたのに対して、漢字(図14)と会話(図18)の結果では、「ちょうどよい」の回答が減り、「易しかった」と「難しかった」の両方が増えているのがわかる。聴解(図17)でも「難しかった」の回答が増えている。

留学生に対する日本語教育のアーティキュレーションの問題

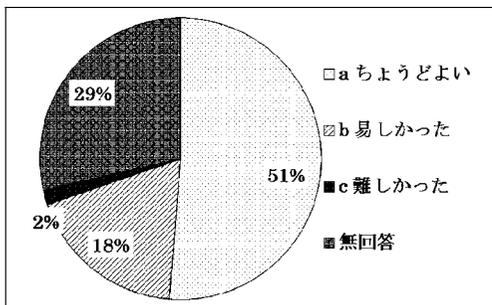


図12：文法

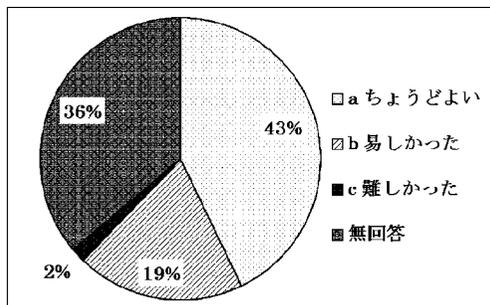


図13：語彙

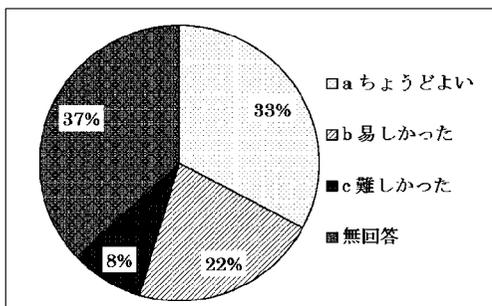


図14：漢字

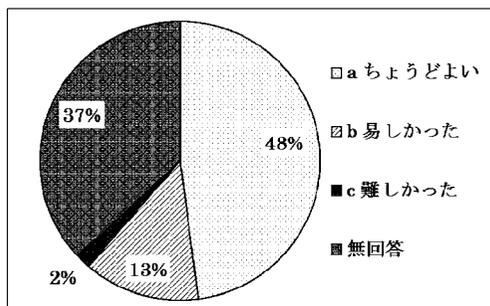


図15：読解

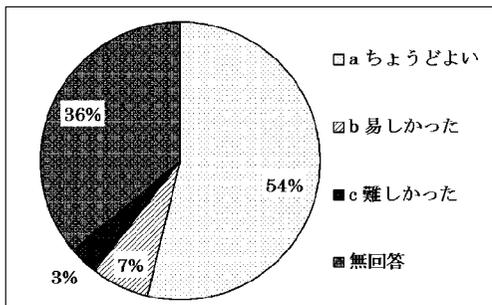


図16：作文

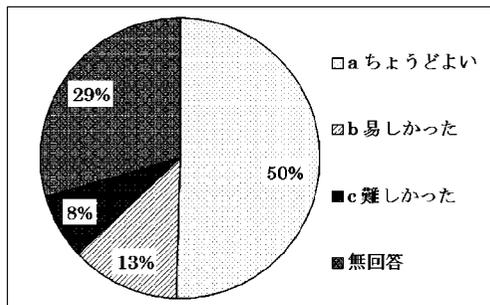


図17：聴解

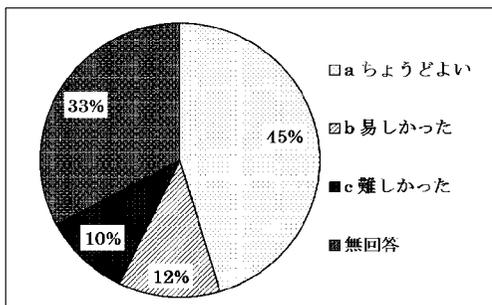


図18：会話

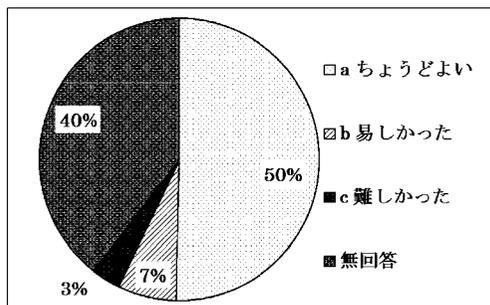


図19：総合

これを、回答者が漢字圏か、非漢字圏かに分けて分析してみると、漢字 (図20)、読解 (図21)、作文 (図22) などのクラスについては、漢字圏が「易しい」、非漢字圏が「難しい」と答えている回答者が多くなるのに対して、聴解 (図23)、会話 (図24) のクラスについては、漢字圏も非漢字圏も「難しい」と答えている回答者が多くなっている。

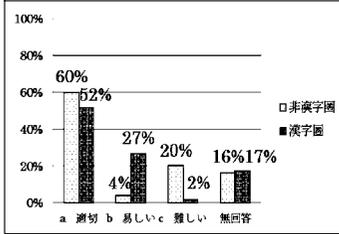


図20：漢字

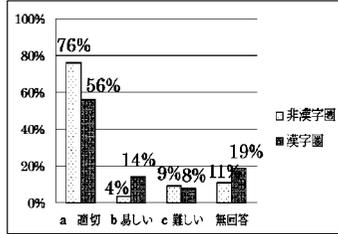


図21：読解

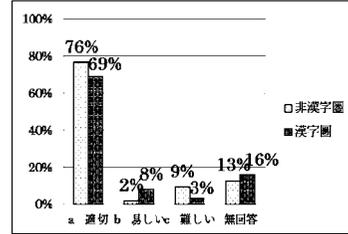


図22：作文

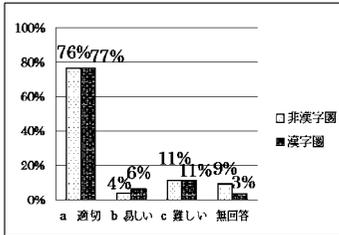


図23：聴解

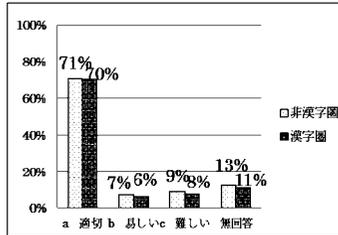


図24：会話

当然といえば当然であるが、総合的に見た場合と、技能別に見た場合とでは、レベルの適切さに関して、文化圏によって異なる意識が見られた。このような中上級の技能別のカリキュラムにおいて、同じレベルの異なる技能クラスの中の横のアーティキュレーションをどのように考えるかは、今後の課題であろう。

### 3.2 レベル変更に関して

レベル変更に関する4項目についての結果は図25～27のようであった。

ブレースされたレベルが「易しすぎた」あるいは「難しすぎた」と回答した場合、「レベル変更をしたか」という質問に対して、図25のように変更した者は3%にすぎず、しなかった者が41%、56%が無回答であった。

変更しなかった理由として、「少し下のレベルで基礎知識を強化したい」が10件、「自分の努力で何とかする」が5件、「自分の日本語能力にほぼ一致しているから」が3件あり、ほかに「面倒くさい」が8件あった。また、「ルールで駄目と言われた (1件)」「レベルアップに自信がない (1件)」「忘れました (1件)」なども見られた。無回答が56%もいるとい

うことは、長く学習を続けている者は忘れていくということも考えられる。

その結果、図26の変更した結果のレベルは、PT直後のレベル（図10）と比べると、200レベルが減って100レベルが増えたこと、800レベルが減って900レベルが増えたことを除いてあまり変わっていない。

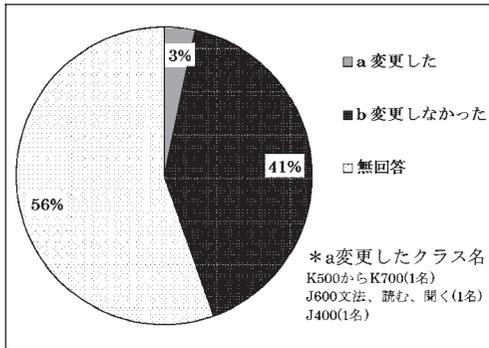


図25：レベル変更をしたか

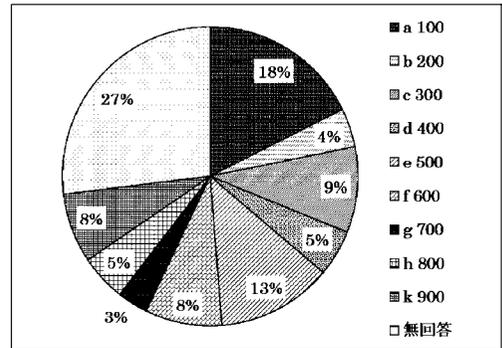


図26：レベル変更の結果

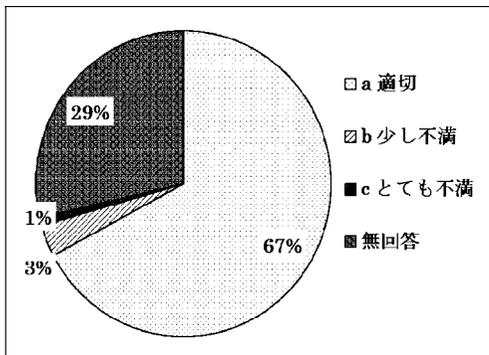


図27：現在のレベルの適切性

図27に示した変更後のレベルの適切性に関する満足度は、PT直後（図11）に比べると、61%から67%へと上がっており、「少し不満」という回答も11%から3%へと下がったことがわかる。

現在の技能別の日本語クラスが自分に合っているかどうかという質問に対する回答も、プレース直後の回答（図12～図19）より「ちょうどよい」が若干増えただけでほぼ変わらなかったため、紙幅の関係もあり、ここには記載しない。

### 3.3 日本語コースのオリエンテーションに関して

日本語コースの授業が始まる前のオリエンテーションで、十分な説明が行われているかどうかに関する質問に対する回答結果を以下にまとめる。

オリエンテーションでの説明によって日本語プログラムの内容理解ができたかどうかという質問に対して、図28のように、ほとんどの学生（81%）が理解していたと回答していた。一方「あまり理解していない」が13%、「理解していない」が4%いた。

また、成績のつけ方に関しても、図29のようにほとんどの学生（85%）が理解していた

と回答していたが、「あまり理解していない」が10%、「理解していない」が1人いた。

成績のつけ方が「あなたの国と同じか」という質問には、46%の回答者が「同じではない」と答えているが、18%は「同じ」と答えていた。

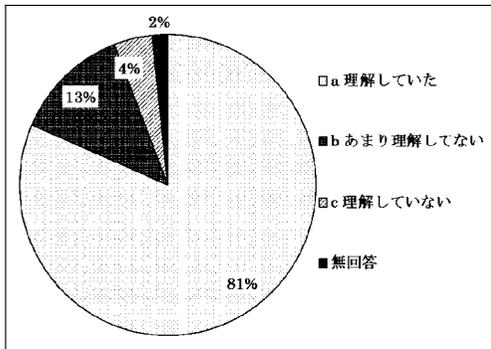


図28：日本語プログラムの内容理解

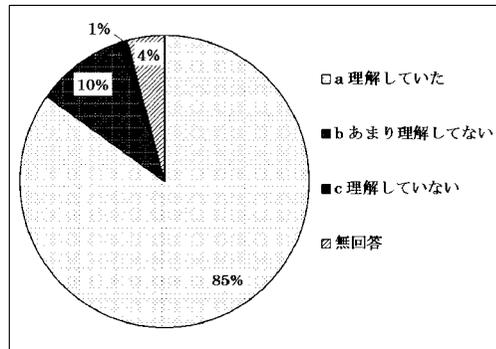


図29：成績のつけ方

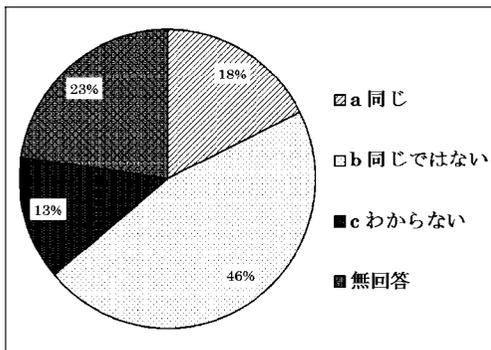


図30：あなたの国と同じか

以上のように、補講コースの受講生のうち半数近くは、異なる評価方法による教育を受けて来たと思われるが、オリエンテーションでの日本語プログラムの内容説明や成績のつけ方に関する説明は、多くの受講生に理解されていたと思われる。

### 3.4 日本語教育のアーティキュレーションに関して

日本語コースの受講生にとって、自分の母国で受けて来た日本語教育と本学の日本語教育プログラムとの間に横のアーティキュレーションがうまく機能していると感じられているのか、あるいは何らかのギャップを感じているのかを知るための質問項目に対する回答結果を以下にまとめる。

まず、図31のように、自分のレベルやニーズに「合った授業がなかったらどうするか」という質問に対して、「授業を受けない」と答えた者は9%に留まっていた。対処の仕方として、「やさしいレベルを受ける」という回答が21%、「難しいレベルに挑戦する」という回答が57%あり、受講生はどちらかという、難しいレベルに挑戦したいという希望を持っていることがわかった。

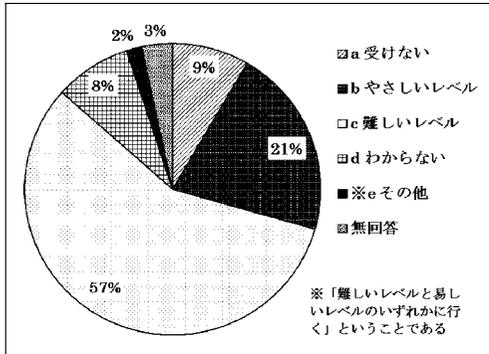


図31：自分に合う授業がなかったら  
どうするか

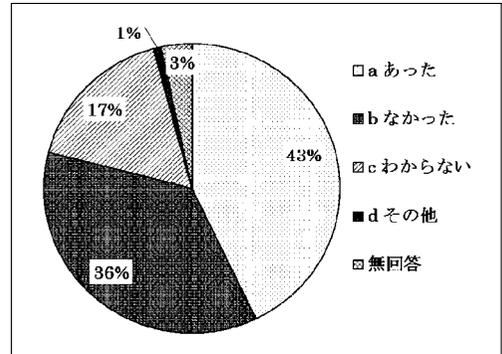


図32：来日前の準備

次に、「来日する前にやっておいたほうがいいことがあったか」という質問に対しては、図32のように、「あった」と答えた者が43%、「なかった」という者が36%、「わからない」者が17%という結果であった。

「それは何か」という自由記述には、以下のように日本語をやっておけばよかったという回答（英語や中国語で書かれたものは日本語に訳した）がかなり見られた。以下に代表的なものを挙げる。

- ・日本語の基礎知識（仮名や初級文法など）を勉強しておく（10）
- ・日本語を勉強しておく、日本語の授業を受ける、独学する（9）
- ・漢字、語彙を勉強しておく（8）
- ・日常会話を勉強し、練習しておく（5）
- ・日本語の知識を復習しておく（3）
- ・事前にどんな授業があるかを調べておく
- ・たくさん読んだり聞いたりする練習をする
- ・文法や漢字をできるだけ多く覚えておいた方がよかった
- ・日本で作ったテキストを読むほうがいいと思う
- ・語彙、聞くこと、文法
- ・国で日本語を勉強したときもっと努力すればよかった

また、日本への留学を終え、国に帰った後も日本語の学習を続けるかどうかという質問に対しては、図33のように「続ける予定」という回答が88%に上っていた。

さらに、上の質問に続けて、「どのような方法で続けるか」を尋ねたところ、図34のように「独学で」という回答が55%と半数以上であった。「大学の授業で（7%）」や「日本語学校で（10%）」が思ったより少なかったのは、回答者の約半数が大学院正規生であっ

たことと関係すると思われる。短期留学生が多ければ、彼らは帰国後、母国の教育機関にもどって日本語学習を続けることが想定されるため、留学時に横のアーティキュレーションが問題となるだけでなく、帰国して復学する場合にも、再度横のアーティキュレーションが大きな問題となることが予想されるからである。

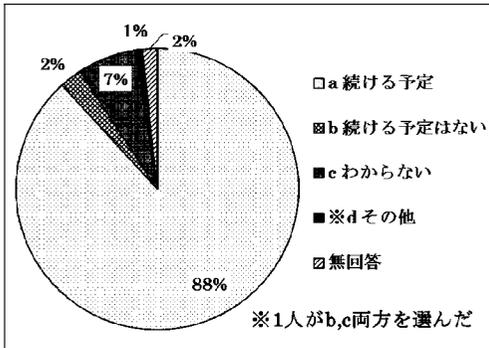


図33：帰国後も日本語の学習を続けるか

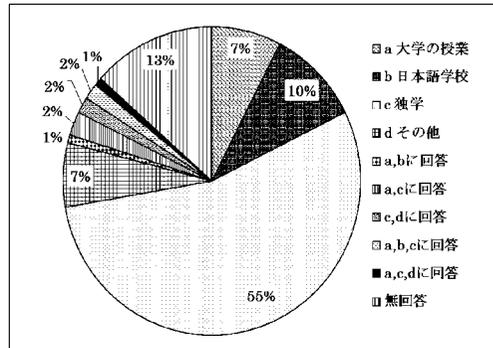


図34：どんな方法で続けるか

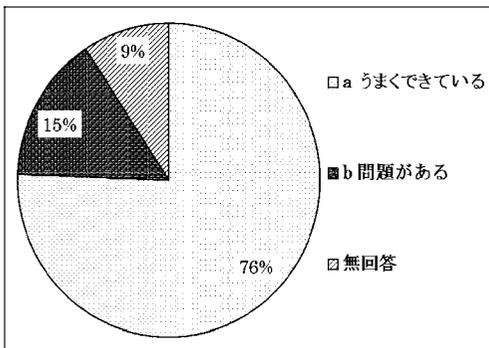


図35：日本語教育のアーティキュレーションについて

筑波大学留学生センターのように、大学院に入って専門の研究をしながら日本語を学習するというニーズが多い場合は、留学生の出身国での教育と日本の大学での教育との間の横のアーティキュレーションの問題よりも、センターの日本語プログラム内での縦のアーティキュレーションの問題の方が大きいことが考えられる。

そして、最後の質問「母国で受けた日本語教育と日本に来てから受けている日本語教育との間のアーティキュレーション（連続）はうまくできていると思うか」という質問には、76%の回答者が「うまくできている」と答えていた。

この数字は、かなり満足できるものであると思われるが、「問題がある」と回答した15%の意見も今後、聞く方法を考えていかなければならないだろう。今回の調査では、どのような問題なのかの具体的な自由記述は、残念ながらあまり見られなかったからである。

#### 4. おわりに

本稿では、2012年5月に実施した日本語教育のアーティキュレーションに関するアン

ケート調査の結果から、筑波大学留学生センターにおける日本語コースにおいて初級から上級までのレベル間にどのようなアーティキュレーションの問題があるか、そしてまた、留学生が出身国で受けて来た日本語教育と筑波大学留学生センターにおける日本語教育との間にある横のアーティキュレーションの問題について、受講生がどのように意識しているかを分析・考察した。

今回の調査では、留学生センターの補講コースの受講生の回答者は短期留学生よりも大学院正規生の方が多かったため、横のアーティキュレーションの問題はあまり意識されていないことがわかった。しかし、特に中上級の技能別日本語クラスにおいては、文化圏によって感じるレベルの難易度に差があることがわかった。また、特に初級と中級のボーダー付近において、学習者の自己レベル判定とPTによる判定との間にギャップがあるらしいことが見てとれた。これは、海外の大学における「初級」「中級」「上級」というレベル分けと、日本の大学において行われているレベル分けとの間に、共通の参照枠が存在していないことに起因する可能性がある。我々の設定している100から900までのレベルが、それぞれ何ができるレベルなのか、そして何ができるようになることを目標として教育を行うのかを明らかにする必要がある。さらに、技能別にも、知識と運用力の両面から各レベルの達成目標を記述し、同一教育機関内の縦のアーティキュレーションを達成する努力をしていく必要がある。

本調査によって明らかになった受講生の実態、各技能における学習ニーズの違いなどを視野に入れ、本学の留学生センターにおける今後の日本語教育のあり方についてさらに考えていく必要があると思われる。

また、筑波大学留学生センターのように、大学院に入って専門の研究をしながら日本語を学習するというニーズが多い場合は、学生の専門分野や卒業後の就職活動に必要な教育との間の学際的なアーティキュレーションの問題も今後検討されなければならないのではないと思われる。本論集の加納(2013)に、2012年1学期の日本語補講コースにおける授業評価アンケートの結果報告があるので、あわせて参照してほしい。

## 謝辞

日本語教育アーティキュレーション・プロジェクト(J-GAP)を主催する日本語教育学会のグローバルネットワーク関係者、およびその経済的支援をしてくださっている国際交流基金に深謝します。また、本アンケート調査の共同作成者であり香港・日本チームのメンバーである東京外国語大学の伊東祐郎先生、香港大学の萬美保先生にも感謝の意を表します。

## 注

1. 2010年8月30日と31日に台湾国立政治大学で開催された世界日本語教育大会において、日本語教育グローバルネットワークにより「中等教育と高等教育の日本語教育におけるアーティキュレーション」に関するシンポジウムが行われた。その中で、世界の日本語教育のアーティキュレーションを改善するためのプロジェクトを行うことが提案され、その提案をもとに、カナダ、ヨーロッパ、香港、アメリカ、韓国、日本が参加して、日本語教育アーティキュレーション・プロジェクト (J-GAP) が行われることになった。のちに中国、オーストラリアも参加し、カナダ、ヨーロッパ、アメリカ、韓国、オーストラリアにおいては中等教育と高等教育の間の縦のアーティキュレーションの問題に、香港と中国とは日本の大学との間の横のアーティキュレーションの問題に取り組むこととなった。
2. 日本語のレベルはJ100~J900の9レベルである。漢字クラスのレベルはK200からK800までの7レベルとJ900レベルで開講されている上級漢字語彙クラス (J961, J962, J963) の計8レベルである。これは、J100レベルでは平仮名、片仮名の学習に力を入れるため、漢字のクラスがないためである。

## 参考文献

- 加納千恵子 (2013) 「留学生センターの日本語補講コースにおける授業評価—2012年1学期の授業評価アンケート報告—」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』28: 365-392
- 高橋悦子・服部真子 (2009) 「日本語教育にみる高校—大学間のアーティキュレーション：教師と学生の声」ウエスリアン大学調査報告 (日本語教育学会グローバルネットワークによるJ-GAP会議資料) : 1-18
- 林未央 (2004) 「アメリカ高等教育におけるアーティキュレーション・システムの標準化—体系性・連続性と弾力性の両立問題—」大学評価・学位授与機構研究紀要『学位研究』18: 107-130
- Byrnes, H. (1990). "Priority: Curriculum articulation—Addressing curriculum articulation in the Nineties" *A proposal. Foreign Language Annals*, 23 (4), 281-292
- Lange, D. (1982). "The problem of articulation. In Higgs, T. V. (Ed.). *Curriculum, competence, and the foreign language teacher*. ACTFL Foreign Language Education Series, 13. "Lincolnwood, IL: National Textbook Co. (ERIC Document Reproduction Service No. ED 210908)

【資料1】 アンケート用紙（日本語版）

日本語教育の連続（アーティキュレーション）にかかわるアンケート調査  
(2012.4.11版)

この調査は、日本語教育学会のJ-GAP Projectのために実施するものです。不明の点があれば、加納（kanochie@intersc.tsukuba.ac.jp）まで問い合わせてください。

- 国籍〔 〕 ■ 性別：〔男・女〕 ■ 日本語学習歴：〔約 年月〕
- 身分：  大学院生  学群生  研究生  短期留学生
- その他〔 〕
- 来日した時期：〔 年 月〕
- この大学で日本語の学習を始めた時期：〔 年 月〕

1. この大学で日本語の学習を始める時に、PTを受けましたか。
- はい →いつ受けましたか。〔 年 月〕
- いいえ →その理由〔 〕
- 質問2～6をスキップして質問7へ。
2. PTはどのような内容でしたか。受けたテストすべてに「レ」をつけてください。
- 文法テスト  語彙テスト  漢字テスト  SPOTテスト
- 読解テスト  聴解テスト  会話テスト  作文テスト
- 面接  その他〔 〕
3. PTの結果、あなたのクラス配置はどのレベルでしたか。
- J100  J200  J300  J400
- J500  J600  J700  J800  J900
4. PTの結果によるクラス配置（レベル分け）は適切だと思いましたか。
- 適切だと思った。
- 少し不満に思った。 →その理由〔 〕
- とても不満に思った。 →その理由〔 〕

5. PTの後で受けた日本語プログラムの授業は、自分の日本語力と合っていましたか。

日本語力	「ちょうどよかった」	「易しかった」	「難しかった」	その他 (自由記述)
■ 文法	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 語彙	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 漢字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 読解	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 聴解	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 会話	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 作文	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 総合	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	

6. 質問5で「易しかった」「難しかった」と答えた人は、レベルの変更をしましたか。

- 変更した。 → 変更したクラス名 { }
- 変更しなかった。 → その理由 { }

7. 今のあなたのクラス配置は、どのレベルですか。(※2012年4月にプレースメントテストを受けた人は、質問7～9をスキップしてください。)

- J100       J200       J300       J400
- J500       J600       J700       J800       J900

8. 今のあなたのクラス配置 (レベル) は適切だと思いますか。

- 適切だと思う。
- 少し不満に思う。 → その理由 { }
- とても不満に思う。 → その理由 { }

留学生に対する日本語教育のアーティキュレーションの問題

9. 今受けている日本語プログラムの授業は、自分の日本語力と合っていますか。

日本語力	「ちょうどよかった」	「易しかった」	「難しかった」	その他（自由記述）
■ 文法	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 語彙	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 漢字	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 読解	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 聴解	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 会話	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 作文	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
■ 総合	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	

10. あなたは授業が始まる前に、オリエンテーションなどで日本語プログラムの授業の内容を理解していましたか。

- 理解していた。  
 あまり理解していなかった。  
 理解していなかった。

11. あなたは授業が始まる前に、オリエンテーションなどで日本語プログラムの成績の付け方を理解していましたか。

- 理解していた。 → あなたの国の大学と成績の付け方は同じですか。  
 同じだ                       同じではない  
 わからない  
 あまり理解していなかった。  
 理解していなかった。

12. もし、この大学にあなたの日本語力にあった授業がなかったら、どうしますか。

- 日本語のクラスを受けない。  
 やさしいレベルのクラスを受けたい。  
 むずかしいレベルのクラスを受けて、挑戦したい。  
 わからない。

13. この大学で日本語のプログラムを受けるために、来日する前に、しておいたほうがよかったことがありますか。

あった。 →それは何でしたか。 [ ]

なかった。

わからない。

14. 留学を終えて国に帰ってから、日本語の学習を続ける予定ですか。

続ける予定だ。 →どんな方法で続けますか。

大学の授業をとる

日本語学校などで勉強する

自分一人で勉強する  その他 [ ]

続ける予定はない。

わからない。

15. あなたの国で受けた日本語のプログラムと、この大学の日本語のプログラムは、うまく連続 (アーティキュレーション) ができていると思いますか。

うまくできていると思う。

問題があると思う。 →どのような問題ですか。 どうすればよいと思いますか。

何でも意見を書いてください。

ご協力ありがとうございました。

筑波大学留学生センター

日本語教育部門

加納 千恵子

連絡先: [kanochie@intersc.tsukuba.ac.jp](mailto:kanochie@intersc.tsukuba.ac.jp)